

古代神 の 目覚め

藤田泰彦

青山ライフ出版

目次

養沢	七
会合	二三
縄文人との邂逅	四三
古代神	五五
縄文人の神	六三
それぞれの幸福	七三
縄文人との別れを想う	九一
ヴィシュヌと徳三の協奏曲	九七
再び養沢にて	一〇九

装画——降矢勝也
装幀——江尻智行

古代神の目覚め



養沢

高く覆う大樹が古の社を幾層にも暗く深くどこまでも彩なし染めている。

*

私と杉原さんは田無駅の南口で待ち合わせ、彼の車で都下の養沢神社へと向かう。車は某メーカーの軽だが、宙を飛び廻るカナブンのようによく走り動く。私たちは武蔵五日市駅の前で一旦降りて近くの喫茶店でコーヒーを飲み、それから養沢という神社に赴く。

その養沢神社の鳥居を潜って、まず一对の灰色の龍が左右で坐す手前の石の段を上り、そこから社殿の方へと向かう。この境内では実に太く大きな榎の樹が聳えている。樹齢四百年はあるか。短めの参道の左手には、公民館と社務所を兼ねる小さな建物があり、社殿のほかに右側では小さな赤い鳥居のある稲荷明神が祀られていて、さらに山際の斜面の始まりの辺りに、それこそ名も定かではない神霊を祀る祠でもある石灯籠がある。あれが杉原さんのいう古代神の棲家なのか。

私、藤川靖久と杉原基幸は共にある道教系の宗教団体のメンバーだが、今年の春頃から以前

から関心があった古代神の靈威を感じ取りたいと思い、五月も終わり近い今日、二人でここ都下の養沢神社に來たのだった。

養沢神社の拜殿で二拝二拍手一拝をし、赤い鳥居を建てた稻荷明神やしろの社にも真言を唱え、それから小振りな石灯籠の方に行き二拝をして拍手を打ち、私はおもむろに祝詞を奏上する。杉原さんはこういう古神道の儀礼にはご自身の専門のヨーガほど詳しくはないので、私にまかせ切っている。私たちは太古、古代からの精靈、神靈を目覚めさせ、それを祀り、できれば自分たちや、ほかの人々の幸福にも役立てたいと思うのであった。もともと『記紀』でいわれている神々は結局、当時の権力者の都合によって作り上げられたものであって、本来の土着の神靈はまた別のものであると思われる。土着の神々、それはそれこそ縄文期からずっとわが国の山や森や川や海にも息づき、二十一世紀の現在でも自然の中に棲んでいる精靈、あるいは神靈でもある。私たちは、何とかその神靈を祀る小規模の社でも建てて、社会に良い波動を送ってゆきたいと考えてもいるのだが。

私と杉原さんは一通りの参拝を終え、また一緒に帰途につく。

中野区内にある自分の一軒家に戻れば、安普請やすぶしでは二匹の猫科のやつらがすっかり待っている。一匹はごく普通のトラ模様の猫だが、もう一匹は三年前に、知り合いのインドネシア人か

ら貰った野生の猫のスナドリ猫である。一般的にいつて山猫の方が性格は激しいはずなのだが、うちの二匹の場合はイエ猫の徳三とくぞうの方が荒々しく、野生のヴィシユヌは内気である。めったに來ないが、近所の自治会の幹部の島谷しまたにさんが顔を出したりすると、ヴィシユヌはあわて気味にすぐに奥に引っ込んでしまう。一方、徳三は機嫌が悪いときは仁王立ちになり、口を実に大きく開けて威嚇までする。ガフッ、と。でも、まあ、猫同士は仲がいいのだから、自分の生活は上手うまくいつてもいるのだが。

私の借りている大分古い小さな一軒家の居間兼書齋には、かなりの量の本がある。文芸書もあるが、大体が神秘学や宗教の学術書である。ここでは小型の簡易神棚が祀られ、ほかに弁財天や観世音菩薩の小さな像も置いてある。

私は日本やアジアの神々、精霊を敬い一日を始める。

仕事は園芸関係の業界雑誌の編集である。だが、私はそれほど植物が好きでなく、庭も狭いので特に何かを植えたりはせず、部屋の中には数種のエアープランツなどを置いていたのだが、数年前にその砂漠の植物を扱いだした頃には水のやりすぎで死なせてしまおうという愚行を繰り返してしまったが、ここ一、二年はさすがに程良い水加減が分かるようになった。植物はほかにトラノオを、これは近所の花屋さんから貰ったものだが、部屋の隅に置いてあ

る。それ以外には秩父駅前や奥多摩で買った同地の植物の鉢植えなどがある。

まあ、本年五十の自分はシングル・ライフを程々は楽しんでもいるのだが。いや、そうせざるを得ないともいうか。身内は父親が大分昔に亡くなっているし、八十代も後半の母は東北の姉のところですっと暮らしている。友人に関しては、所属する宗教団体の人たちもそうだが、何しろ同じ町に二十四年も住み、いな、棲み続けてもいるので商店街の自営業の人たちや、何人かのお坊さんや神主さんとも顔馴染みである。そんなことから、自分は今飼っている二匹の猫らと上手く残りの人生を終えられれば、それでいいのであるが。

もともと私は能天気のうてんきの極楽トンボ的な性格なんで、あんまり物事を深刻には考えないところがあった。だが一方では、死後の世界、輪廻転生とか霊界とかにも関心があり、その方面の本も随分読み、ここ数年は仏教専門誌に寄稿したりホラー系の文芸雑誌のコンテストに応募したりもしている。が、佳作までにも至らず、一度だけ末席というか選外努力賞をやっと頂いたくらいである。

友人の杉原さんは七十代だが、ヨーガの導師で、ヨーガの会を主催して都内の公民館などで教室を開いている。だが、道場や著作があるわけでもないのが最晩年のここで、もうひと飛躍したいと考えてもいて、共に独り者であるから、所属している台湾人中心の道教系の団体の中